

大切な時間

山 泰 幸

縁があり、赴任して、9年目になる。国立大学の地味なコンクリートの建物のなかで学生時代を過ごしてきた私にとって、まるで絵画のような美しい関学のキャンパスは、この世のものと思えないほど魅力に溢れていた。

赴任が決まって、初めて関学の正門を入ったとき、右手に古ぼけた建物が見えてきた。ランバス・チャペルである。そっと扉を開けて、誰もいない静かなチャペルに入り、歴史を感じさせる椅子に腰を掛けて、しばらくもの思いに耽った。長い学生生活を終え、社会人として初めての職場で、このようなキャンパスで働けることの幸せを心から感謝したことを思い出す。その気持ちは、今も変わらない。

それから関学での生活のなかで、国立大学との違いをいくつも感じるようになった。一つは、学生がとても爽やかであることである。勉学面で優秀なことはもちろんのことだが、たいへんマナーがよく、コミュニケーション力に長けていることである。不器用でぶっきら棒な連中のなかで過ごしてきた私にとって、同じ学生とは思えないくらい驚いた。もう一つは、事務のスタッフのみなさんが、仕事ができるだけでなく人柄も素晴らしいことである。この間、どれだけ助けられたかわからない。この場を借りて、お礼を述べておきたい。

そして、私が最もびっくりしたのは、チャペル・アワーの存在である。厳しい授業スケジュールのなか、毎日30分の時間を確保することは至難のわざである。全国的に見て、このような大学は他にはないだろう。これこそ関学のゆとりであり、関学生を生み出す大切な時間である。心を落ち着けて、自分を振り返り、生きる意味について考える。そのような時間が確保されていることを、本当に素晴らしいと思う。そして、そのような時間がなかった自分の学生時代を思い出すと、関学生をとて羨ましく思うのである。

最近、地方に講演に行った際、地元で長年、奉仕活動に熱心に取り組んでいる年配の女性に出会った。彼女は自分も関学の卒業生であると告げて、チャペルの思い出を語られた後、こう言われたことが印象深かったので紹介しておきたい。「このような活動が続けてきたのも、いま考えてみると、“Mastery for Service”が私の中に生きているからだと思います」と。

(人間福祉学部教授)